

花火の記憶

佐藤榮子

今年も岡山の花火大会はなかった。例年、夏祭りはうらじゃ踊りとセツトなのだが、昨年豪雨災害の復興途上にある今、中止となった。

うらじゃ踊りは炎天下にも関わらずエネルギーギッシュに踊っている。

鬼の乱舞を見た。かわいい鬼がいる。メイクも随分かわいくなっている。

突然、かつて職場の先輩と花火に行ったことを思い出した。先輩は私より15歳上である。

その日は先輩と残業をした。花火の日でもあり、ポンポンと打ち上げの音が事務所の中まで響いてきた。大急ぎで仕事を片付け、二人は花火会場に向かった。

相生橋に着く頃には尺玉がドンドン打ち上げられていた。

ドンッパ、ヒュルヒュルッパチパチ……ドンッ！ 風の向きか橋の上にも火の粉が降って来た。

花火好きの私の胸はもう走りたいくらいに高まり、先輩の手をグイグイ引つ張って、私知っている最高の場所に連れて行こうとした。

橋の半ばで先輩が止まった。顔が青ざめ「もうよう行かん栄子さん一人で見てお帰りなさい」と言った。体調が悪いのかと心配し、二人はきびすを返してバスに乗った。

並んで座ると先輩が青い顔で「ごめんなさいね」と言って話してくれた。

彼女は大阪の女子師範に学んでいた時、軍需工場に動員され、大きな兵器工場に毎日通っていた。

ある日、B29の大編隊が来て工場の上に爆弾を雨の如く落としたり。みんな必死で工場の外に掘っていた防空壕に向かつて走った。

防空壕は幾つも並んでいたが、女子師範の壕は工場から一番遠くにあった。

いつも教わっていたのは、敵機から爆弾を近くに落とされた時は、両手で目と耳を押さえて突っ伏す。敵機が去ると素早く安全な場所に避難せよと。

その日の空襲はいつもと違い、何機も編隊が繰り返し飛んできた。低空飛行しながら、機銃機で撃つて来た。米兵の顔が見えた。必死で「おかあちゃん！ おかあちゃん！」と半泣きしながら走っていたら兵隊さんが「どこでもええから早う入れ」と叫んでくれ、近くの壕に飛び込んだ私は助かったが、友達はその時何人も亡くなった。

爆弾は花火のように、線になり途中で火花になって落ちて来る。長い間忘れていたあの日のことを今日、今、はっきり思い出した、と語った。

その先輩も今はこの世にいない。昭和から平成、令和へ。戦争の記憶を語る人は少なくなった。

花火大会はいつの世も、戦争も災害もない平和の祭典であってほしい。

作者 佐藤榮子

題名 花火の記憶

山陽新聞夕刊エッセー

2019.09.05

掲載